

東京・武蔵野にある佐藤友泰氏の創英教育研究所における指導記録からそのほんの一部分を紹介します。

数十人に及ぶ子供たちの、数年にわたる観察と指導の記録が毎週積み重ねられて、膨大な資料になっています。

集団保育への疑問

私の研究所の障害児に対する教育法に対しては、同じように障害児教育に携わっておられる先生方にとって、大いに異論があると思います。障害児こそ集団保育の場が必要であり、集団の場こそ障害児を発達させる所だという考え方は、全面的には否定いたしません。それでもなお、集団の中ではどうにもならなかったという親の訴えを聞くにつけ、そして、そういう子供たちに一对一の場を設定して指導していく経過を見るにつけ、集団の中でなければ社会性が発達しないということは、誤りであると思うようになりました。

不幸にも、ある事故が原因で知恵が遅れ、言葉も出ず、年齢相応の身の回りの処理も充分でなく、社会性すら遅れている子供たちにと

って、本当に集団の場だけが良いのでしょうか。ましてや、そういう子供たちに文字を教えるなんてとんでもない、という固定観念には、私は大きな疑問を持っています。

一对一の指導形態は、子供が育つ最も基本的な型であり、これが充分に与えられなかった子供には、将来大きな問題が生ずることが多いようです。

一对一の関係さえ充分に与えられなかった子供の多くは、集団に入れられると萎縮したり、人間関係を断ったり(自閉児)、愛情を求めするために粗暴になったり、一切無為で抵抗したり(自閉でない情緒障害児)、集団生活によって得るべきものがないばかりか、劣等感を強くして適応できない子供が多く、そういう子供が私の研究所に大勢訪れています。

そういう子供たちを受け入れて、一对一の関係で指導いたしますと、萎縮していた子供も、一切無為で抵抗していた子供も、反社会的だった子供も、殻を開いて社会的に適応を始め、完全に解決されないまでも、解決に向かって進むようになりました。